JAELE Newsletter
上越英語教育学会通信
The Joetsu Association of English Language Education
July 2012 No. 7

走る

清泉女学院短期大学教授
中村洋一
（平成 4 年度修了生）

2012 年の前半もまた忙しく、あたふたと動き回っていた。

1 月、センター試験の翌週に鹿児島へ出かけ、鹿児島大学で開催された日本言語テスト学会(JLTA) 第 34 回研究例会に参加した。鹿児島県中学校教育研究会英語部会の皆さんと、「新学習指導要領が求めるコミュニケーション能力とその評価のあり方」とのタイトルで、熱い、本当に熱い議論を交わした。30 数年間に英語教員として経験した数回の大きな方向転換の、あまりに激しい「時計の振り子」の振れを遡っているうちに逆上して、かなり heat up してしまった。

3 月には、高雄第一科技大学と連携協定締結のため、卒業式の前日まで、4 泊 5 日で台湾に出張した。学術交流の手始めに、A report on language CAT in Japan とタイトルをつけたプレゼンテーションの機会を与えていただいた。「台湾では test centered English education が行われているから、どこでもいつでも受けられるコンピュータ適応型テストといっても、かえって cheating が横行する懸念が多いのではないか」との指摘に興味を持った。当日案内をしてくれた女子学生は、入学時に TOEIC 700 点以上だったと話していた。第二外国語として学習している日本語での会話が中心になったが、流暢な、正しい日本語だった。花粉症が出たのか、くしゃみをしてしまった私に、間髪を入れずに「センセイ、これ、お使いください」とティッシュペーパーを差し出してくれた時は、正直、びっくりした。我が家の娘たちだったら、「きったないなぁ、とぉちゃん、もぅ」なんて言うところだ。学力と人間性どちらか一方だけを強調するのではなく、両方を伸張させる教育は不可能ではないのではないだろうか、とこちらもまた、疑問形の憤りが湧いてきた。

5 月は東京へ 2 回出かけた。はじめは共同研究の打ち合わせで、speaking test の実施計画を立てた。遅々としてではあるが、ようやく日本でも本格的なパフォーマンス・アセスメントの研究

が進みつつあることを実感している。2 回目は IT ソリューションへの参加と、CALL 施設の視察だった。CALL のリプレースを検討する委員として、現有 CALL の使用状況を精査してみたら、ほとんど使用していない機能が多々あった。リプレースの限られた予算の中で、もう少しスリムで必要・十分なものはないかと探していたら、CALL から LL を取った、「授業支援システム」と呼ばれるものを見つけ、目から鱗が落ちた。

5 月下旬は、ソウルへ出かけた。Korean English Language Testing Association (KELTA) の International Conference で、科研の共同研究者として関わっているプロジェクトについて、A report on Japanese Computerized Adaptive Test (J-CAT)とタイトルをつけて発表した。J-CAT は Internet を利用し、いつでもどこでも無料で受験できる、日本語能力のコンピュータ適応型テストで、聴解・語彙・文法・読解の 4 つのセクションからなるテストを 2009 年から公開運用している。2010 年からは、S-CAT と呼ぶスピーキングテストの開発が始まっている。スピーキングについて複数のスケールを用いて採点したデータによってモデルを構築するか、それとも 0 – 1 データを採用するかという、プロジェクト内の議論を紹介したところ、「パフォーマンス・テストの採点に関する限界を鑑みれば、思い切って dichotomous score を使用して良いのではないか」との指摘に、元気が出た。

韓国では、College Scholastic Ability Test (CSAT)と呼ばれる大学入試の英語セクションを、National English Assessment Test (NEAT)と呼ばれる新しい英語テストに移行する計画が 2015 年の一部実施に向けて進められている。NEAT では、コンピュータによるテストが導入され、スピーキング、ライティングも含まれる予定だと聞いた。NEAT 実施のために、国をあげて作問者・評価者の育成を行い、受験生、保護者、初等・中等学校の先生方への啓発活動を実施している。"Your improvement in Korea is so rapid and steady." とコメントしたら、"The Japanese researchers make suggestions and take no action, it is Koreans that take action first." と指摘されてしまった。我が国における high stake tests の実施においても、そろそろ発想の転換が必要になるのではないか、思い切った改善策を打ち出すべきではないかと、強く感じた。

6 月の始めは京都へ出かけ、龍谷大学で行われた、第 35 回 JLTA 研究例会に参加した。e ラーニングと言語テストをテーマに、Moodle や Clicker を使用した授業・テストに関する発表があった。Multimedia content、High-Stakes Tests with Moodle、普通教室でのテスト、テストアイテムのオーサリング環境といった課題の解決に向けた、先進的な取り組みについて学び、まだまだ潜在している新たな可能性が多々あることを知った。

昨年、突然、25 年ぶりにランニングを再開した。7 月の猛暑の中開催されたハーフ・マラソンでレースに復帰し、2 時間 17 分 35 秒で完走した。上教大に入学する前は、日本陸連登録の、そこそこシリアスなランナーだった。1 回だけ出場した河口湖マラソンの公式記録は 3 時間 10 分 7 秒で、当時のフルマラソン世界記録に「あと 1 時間」まで迫っていた。「走る爆弾なんとかさん」の記録と比べても 30 秒早かった。「走る癇癪玉おじさん」と名乗りたいくらいだ。上教大在学中は定時制高校との二股だったし、生徒指導の仕事も大変で、だんだん走ることから遠ざかってしまった。そして、どんどん肥えてしまい、完璧なメタボ体型になってしまっていた。

昨年のハーフ・マラソンで火がついて、ランニングは今でも継続している。鹿児島では、桜島を正面に見て、甲突川の遊歩道をゆっくり走った。台湾では高雄の観光地、蓮地潭の岸辺を革靴

で速歩した。東京では、皇居周回コースへデビューを果たし、仕事の前に 2 周走った。揺れる瞳の中に、IT ソリューションで落ちた目の鱗の破片が残っていたが、これは、昨年、飛蚊症と診断された症状だ。ソウルでは、数年前に改修・整備された清渓川の遊歩道を走った。川の中には大きな鯉がいっぱいいて、遊歩道には、たくさんの恋する若いカップルが腕を組んで歩いていた。京都では、鴨川のサイクリング・ロードを走った。向こう岸に見える山肌に大の字がくっきり浮き出ていた。

思えば、修士論文を提出した 1991 年の暮れから、英語教育について、ちゃんとした勉強を継続してこなかった。忙しさにかまけて、あるいは、山の畑に逃避し、開墾にうつつを抜かしたりしていて、勉強をさぼってきてしまった。

新しい学習指導要領に現場の英語教育はどう対応するのか、英語で英語の授業を行うって、大丈夫か? 小・中・高はもとより、大学の英語教育では何をすれば良いのか? 大学入試での外部試験の参照という提案と、従来から尊重されてきた高等学校までの学習内容を基にするという原則を、どう摺り合わせていくのか? グローバル人材の育成に、英語教育はどのように寄与できるのか? … いつもながら、課題は蓄積し、山積するばかりである。

人生はよく、マラソン・レースに譬えられる。しかし、マラソン・レースの方がずっと楽なことは、走ってみればよくわかる。スタートして、フィニッシュ・ラインまで走れば、レースは完了する。人生よりもずっと単純だ。しかし、一度スタートしたら、泣いても笑っても、自分の脚で、フィニッシュ・ラインにたどり着かなければならない。教員の仕事もそれに似ているかもしれない。早くても、遅くても、ともかく、走り続けることが必要だと思う。前向きに動き続けることが不可欠だと思う。止まってしまってはだめだ。歩いてもいいかもしれないが、中年後期に差し掛かった私には、「これまで」よりも「これから」の時間の方が圧倒的に短い。自分自身でコントロールできない大きなうねりの中にいても、ひとつひとつの課題にコツコツと対応しながら、前を向いて一歩一歩、走って進むしかないと、今また決意をあらたにしている。

ヤマセミ

変わっていく自分を実感する日々

大学院２年　言語系コース（英語）
内笹井　涼

大学生時代の私は、何をするにも気持ちが向いていかない状態でした。サークルに入ったものの、さほど熱中できず、月に２、３回の練習のみ。勉強にも真面目に取り組んだとは到底言えず、成績もＣばかり。就職活動も、他の就活生とは比べ物にならないくらい短い期間で、賞味５社ぐらい受けて、唯一受かった中小企業に就職するに至りました。そこで、社会の厳しさ、自分の甘さを思い知ります。結局、１年足らずで辞めてしまうのですが、自分が働くことをいかに甘く見ていたか実感するには、それは十分な時間だったと、今では思います。

私は今、以前は想像もしえなかったところで、以前は想像もしえなかったことをしています。新潟という場所と、英語教師になるための勉強がそうです。１年働いてから入った「学校」という場所は、以前の「学校」とは全く違うものに見えています。最も根本的な違いは、周りの意識にあります。皆が教師という夢を共有しており、卒業後、教師として働くことを常に意識して研究に励んでいます。私は大学卒業後、大学で学んだことが何一つ役に立たないことに愕然としました。「勉強」が役に立ったことが、実感として感じられないのです。ただしかし、ここでは常に卒業後を意識して勉強に励むことができます。ともに教職を目指す仲間がいます。現職の方もいます。常に現場に出てからのヒントが見つかる場所であり、だからこそ日々の勉強のモチベーションを維持するのはさほど難しいことではなくなるのです。

１年間の社会人経験や、在学中のマルタへの１ヶ月留学で、視野が大きく広がりました。大学以前の私の生活は、長らく独りよがりでしたが、ここ数年で、だいぶ自分というものが変わり、他の人へ目を配れるようになったと実感しています。経験上、営業活動と教育は、通ずるものがあります。優れた営業には、自分を絶えず殺して、相手との対話の中で、相手の求めていることを正確に汲んで、最適なソリューションを提示することが求められています。それは、教育も同じです。子ども達が何を求めているか把握するためには、自分を一時消さなければなりません。あくまでも教師は脇役であり、主役はまぎれもなく子ども達なのです。マルタへの留学では、英語という言語そのものよりも、まずコミュニケーションなしでは人は相互に理解できないということを学びました。外国人は、今日本でよく言われる、「空気を読む」という作業をしません。言わなければ、伝わらないというスタンスなのです。言葉によるコミュニケーションを図るために、英語が流暢な彼ら外国人は、我々に向かって分かりやすいように話してくれます。これは子どもと接する時と大差ないような気がしています。我々大人と子どもとは、持っている知識が全く違います。それゆえ、持っている「言語」も違うのかもしれません。だからこそ、子どもと理解し合うには、自分の言語レベルを子どもに合わせなければならない。これは、教師が永遠に「分かりやすさ」を追求しなければならない義務を暗示しているとともに、子どもの話を理解することが困難だということも示しています。ひょっとしたら、永久に理解し合うことはできないのかもしれません。しかし、必死に理解しようともがくのが、教師の醍醐味なのではないでしょうか。

教師を目指す身として日々考えていることはこのように色々ありますが、私の支えになっている

考えが一つあります。全く同じ性質を備えている教師は、この世にはいないということです。千差万別、色々な教師が現場にはいらっしゃり、また、必要とされています。私は、話が特別上手なわけでもなく、英語が達者なわけでもありません。コミュニケーションを取れずもがき苦しんでいる、そんな中どう乗り切ってきたか、その経験を不器用ながらも子ども達に伝えたいのです。

歩む

大学院２年　言語系コース（英語）
居永　通子

また始まる学生生活に期待を寄せながらも、新しい環境で過ごすことに不安な気持ちを抱えたまま入学式を迎えた１年前の春のことを、今でも鮮明に覚えています。その不安な気持ちは、４月の間に難なく吹き飛ばされました。英語コースの同期、先輩方、先生方に恵まれたからです。英語コースの仲間とは授業中だけでなく院生室でも議論を交わすことができる関係を築くことが出来、日々切磋琢磨しています。

私は、幼い頃から英語を話せることや海外の生活に憧れを抱いていました。その念願が叶って、高校生の時に短期留学と長期留学を経験しました。その経験から、生活することそのものや生活の基盤となるコミュニティづくりに強い関心を持ちました。帰国後、地元である滋賀県を離れて、少子高齢化が深刻な、鳥取県にある鳥取大学地域学部地域政策学科に進学しました。生活経験を通して地方の現実を目の当たりにするとともに、大学では、都市計画論、コミュニティ論、高齢者福祉、都市農村交流、地域間交流、グリーン・ツーリズム等を学びました。大学の講義での学びだけでは飽きたらず、国交省主催の地域づくりインターン事業（事業仕分けにより、現在は廃止）に参加したり、日本全国の都市や過疎と言われる町に足を運んだりしました。各々の地域で見聞きすることは、すべてが新しく、留学とはまたひと味違った異文化との出会いでした。

自由気まま、気の向くままに過ごしていた大学生活も終わりを迎え、就職するために地元へ戻りました。しかし、留学での学びや大学生活で得た学びを何とか具現化できる仕事に就きたい！という思いをどうしても拭うことのできなかった私は、週末や連続休暇を利用して県外へ出掛け、道を模索する日々が続きました。そんな中、私の中である言葉がキーワードとしてだんだん明確になってきました。それは、「地域づくりは人づくり」という言葉です。この言葉は、地域づくりの現場ではよく耳にする言葉です。それまでにも知っていた言葉なのですが、この時はじめて自分の中でストンと落ち、自分がやるべきことは、これではないかと強く思いました。

では、「人づくり」に関わる仕事とは何でしょう。どんな仕事も人が携わっている限り人づくりの仕事である要素があると思います。ですが、私の中で真っ先に浮かんだのが、次世代を担う人を育てる現場であり、地域の中心である学校に携わる仕事、教員の仕事でした。生活の場である地域を考えることができるということは、その地域を大切に思えるだけではなく、どんな土地へ行っても、どんな仕事に就いても、周りの人と協力し合って、自身の人生を豊かに生きることができる力に繋がっていくのではないか、と考えています。人は学校だけで育てられるわけではなく、家庭や地域、その他の要因もあります。しかし、学校は多くの子どもたちにとって社会経

験を始める場所であり、子どもたちの将来に大きな影響を与える経験を得る場所です。そこで働きながら、子どもたちの成長を見守りながら、自分自身も成長してゆける教員という仕事の魅力はその他の職業にはないとても大きなものだと思います。その思いは、５月下旬に行なわれた小学校の観察実習でより確信に近いものとなりました。子どもたちを目の前にすると、普段の平面的な学びが、立体的に浮かび上がるようでした。

英語の授業が大好きすぎて、熱が出ても意地でも学校に通った中学生の私。そこから巡り巡って、今、教員を目指している自分がいます。あの頃の思いも、これまでに得た様々な経験も、今の思いも大切に、この先出会うであろう子どもたちの姿を夢見ながら、残りの学生生活も充実したものにしていきたいです。

学び、教えること

大学院２年　言語系コース（英語）
岩下　温美

教育を勉強するために、大学院に来て２年目になりました。私はここ上越の出身で、学部時代には離れていた地元の四季の鮮やかさを再発見しています。免許プログラムで小学校・中学校の教員免許を取得するための勉強をしながら、自分の子ども時代を思い出すようです。小中高と母校が上越市内にあるため、恩師と再会する機会も多く、自分を育てて下さった先生方に改めて感謝するばかりです。

大学院に入学して、上越教育大学にいる方々のホスピタリティの高さに驚きました。教育を志す人は、こうあるものなのだと、自分の目標が示される思いでした。英語コースの院生の間でも、学び合い・助け合いが自然と実現し、素晴らしい環境で学ぶことができていると感じます。共に勉強する仲間たち、彼らひとりひとりにしか救うことができない子どもたちがいるのだろう思うと胸が熱くなります。同様に自分にも、そんな出会いがあるのだとすれば、学ぶことを止めることはできないと感じます。一生付き合っていきたいと思うものや、行為を見つけられたことは本当に幸福なことだと思います。

現在は英語コースに所属していますが、学部ではスペイン語を専攻し、言語学を学んでいました。外国語を学ぶ過程で、母語の大切さを強く思うようになり、国語科をメインとして教職課程を履修しました。高校での教育実習では、自分の力不足・知識不足を痛切に感じ、伝えたいことがあるだけでは教師にはなれないという当たり前のことに気付かされました。「言葉と私」で完結した世界には、子どもの姿がありませんでした。子ども理解を大切にした、子どもと一緒に作る授業を目指して、今年、小学校実習に臨んでいます。

教えるための学問に従事する中で、何のために学び、何のために知るのか、ということをよく考えるようになりました。本当に学ぶべきことは内容ではなく、方法なのではないかと最近は思っています。小説『ディスカスの飼い方』の中で、主人公は、それ自体を習得する目的ではなく、理解できないものへのアプローチを得る手段として、ディスカスのブリーディングに挑みます。ひとつ、未知を既知に書き換える経験は、他の、これから出会う物事に、応用できるということ。あることは、そのこと自体からしか学べないのではない。その他のことから、少しずつ有用な知

識を蓄積していって、モデルを構築することができる。反復と反省の中で、私たちは、徐々に、「正しい」ルールに近づいていける。そんな風に思います。学ぶことなんて、つきとめるところまで行くのなら、何だっていいのだろうと感じます。どうやってやるか分からなかったものが、分かるようになったとき、私たちは別の世界に行ける。その精神的な長距離移動を、子どもたちに体験させ、自分も経験し続けていきたいと思っています。小説の主人公は、こう語ります。「何かを知るということには、必ず何かがわからなくなるという引換券がついているようだ。」と。教育と向き合い続けるということも、その繰り返しだろうと思います。「分からない」からの出発を常に楽しんでいたいものです。

日々貪欲に知識を吸収して、英語教育を研究してきたと言えるだけの、若さ以上のものを身につけて、修了したいと思っています。そして、修了した先では、出会いを大切に、大切に繋いで、先輩方とも、後輩たちとも一緒になって、日本の教育をより良くし、子どもたちを笑顔にすることができたらいいなと、子どものように夢見ています。

日本ミツバチの分蜂蜂球*（2012 年 5 月 4 日茨城県土浦市）

＊ 分蜂蜂球：

新たな女王蜂が誕生した巣では分蜂が起こり、女王バチは働きバチを引き連れ、巣を出て新しい巣の場所を探しに出ます。この際、元の巣の近くに、女王バチを護って、働きバチが塊のようになる分蜂蜂球を作ります。写真は野生種である日本ミツバチの分蜂の様子です。もし、写真の様な状態を見つけたら、そっとしておきましょう。

校長の眼～つぶやき・うたかた～

連載　第７回

学校行事について考える　～修学旅行の引率を通して～

苫小牧市立啓明中学校
校長　佐々木郁夫
（平成４年度修了生）

現任校では、２年前まで東北地方で３泊４日の行程で旅行をしていました。１日目は青森県内でファームステイ、２日目は秋田県内～岩手県での見学と宿泊、３日目は岩手県内（中尊寺等）を経て松島見学後、仙台港からフェリーで苫小牧港へ帰着し、バスで学校へ戻り解散するコースが一般的でした。ところが、平成２３年３月１１日に発生した東日本大震災の影響のため、昨年は急きょ２泊３日の道内バス旅行に切り換えました。１日目は日本一の集客数を誇る旭山動物園（旭川市）、－４１℃の体験ができるアイスパビリオン（上川町）、銀河・流星の滝を見て景勝地として名高い層雲峡温泉に宿泊しました。２日目はトリックアート美術館（上富良野町）見学後、空知川でラフティング体験をし、札幌市郊外にある定山渓温泉に宿泊しました。このホテルでは、本校生徒だけを対象にした吉本興業の漫才師３組による特別公演が行われ、生の迫力ある笑いを楽しむことができました。３日目は札幌市内の大倉山ジャンプ競技場、ウインタースポーツミュージアムの見学後、羊ヶ丘展望台付近で昼食のジンギスカン食べ放題を満喫してから札幌ドーム内の見学を行って苫小牧に戻ってきました。

今年は３泊４日の道東方面への体験を重視した旅行にしました。当初は世界遺産の知床遊覧を計画していましたが、出発直前に流氷のため遊覧船が運航できなくなり、コースを変更して実施しました。例年は５月に実施していましたが、今回は４月中旬にしたため、まだ寒い中で様々な体験をすることができました。以下に私たちだけの体験を紹介します。

○　屈斜路プリンスホテル全館貸し切り

このホテルは目の前に湖（この時点では結氷中）があるリゾートホテルで、実はまだ正式の開業前でした。本校の４学級生徒だけが宿泊し、バイキングで和洋中の豪華な夕食、朝食を満喫することができました。生徒たちは大満足でたくさんの料理に舌鼓を打ちました。私の宿泊した部屋はジャグジー付きの広々としたコーナールームでした。ちょっと緊張してすぐには眠れませんでした。

○　阿寒湖の氷上遊覧

湖水開きがまだのため、正式な遊覧船の営業前でしたが、氷がなくなるまでの１週間限定で砕氷帯を進む観光遊覧を行う時期でした。本校だけのために貸し切り遊覧を通常１５分の

ところ４０分に延長して、「ゴォーン」という衝撃音を響かせながら氷に体当たりする船上で、得難い体験をしました。

○　阿寒湖アイヌシアター「イコロ」

グランドオープン前に本校のみを対象にして、講話、舞踊、ムックリの演奏などがありました。立派な施設で先住民族の文化について学ぶことができました。

○　トイレタイムで向かった先は摩周湖に近い９００高原でした。ところが、着いた場所はまだ観光客が訪れる季節ではありませんでした。肝心のトイレは何と雪で閉鎖されていました。これもなかなか味わえない体験でした。

○　十勝で畑作や酪農体験

清水町、音更町、幕別町、大樹町に在住する農家の方々のご厚意で１泊２日の就農体験をしました。一戸当たり２～３名の生徒がお世話になり、畑で長いもの収穫、ブロッコリー、小豆、大豆、ジャガイモ、ビート、小麦などについて学び、搾乳体験、羊の毛　刈りなど貴重な体験をしました。松山千春の歌詞にある「果てしない大空と　広い大地のその中で　いつの日か　幸せを　自分の腕でつかむよう」（『大空と大地の中で』より）を彷彿とさせる広大な自然の風景が今も心に残っています。参考までに松山千春の生まれ育った足寄町（約1,408k㎡）と香川県（約1,876k㎡）の面積を比較願います。

旅行を終えて学校に戻って来た生徒たちは３泊４日を振り返る個人新聞を作成しました。どの生徒も異口同音に「楽しかった。また行きたい」といったことを書いており、体験を通して、率直な感動や喜び、人とのふれあいの尊さなどを強調していました。

ここまで、私の引率した２年間にわたる北海道内での修学旅行について意識的に地名や施設名等を入れて紹介しました。興味のある方は是非、今夏あるいは厳冬の時期にご来遊いただければ幸いです。北海道観光の振興のため、ご協力をお願いします。

さて、修学旅行についてその意義を含めて少しお話をさせていただきます。旅行的行事として実施する、あるいは総合的な学習の時間（全部あるいは一部）として実施するといった時間の運用面については、触れません。

中学校生活の３年間の中で、修学旅行が思い出の一つとして必ず生徒の口から出てきます。不思議なもので、どこへ行ったとか何を見たなどは明確に記憶していませんが、楽しかったという感想が多く聞かれます。宿泊を伴い、学級や班を単位として過ごす３泊４日は非常に密度の濃い中身になります。まさに寝食を共にするわけで、学校や家庭にいる時とは全く違った自分と友人の姿、言動や行動などを通し、ふだんはお互いに知らない意外な側面を垣間見ることがあります。

私は我が国の学校教育で大事にすべきものが学校行事だと考えています。昨今聲高に学力向上という言葉が大きく取り上げられています。世の流れに逆行するつもりはありませんが、かつて帰国子女の方が「日本の学校で一番楽しかったのは運動会や学校行事」と言っていたのを思い出しました。我が国の小中高等学校では学級を基本にした活動が中心に行われています。特に小中学校では学級担任と児童生徒の関係は密接であり、特別教室や屋体等で学習する場合を除き、自分の所属する学級の教室で各教科の学習をします。私がかつて担任した人たちがクラス会を開いた折、話題に出るのは中学校の学級における活動でした。体育大会、学校祭をはじめ、様々な行事を通して一人一人が協力し合い、助けあいながら成長していく姿は頼もしく、いつも期待感をもって見ていました。

さて、学校行事には儀式的行事、文化的行事、旅行・集団宿泊的行事、健康安全・体育的、勤労生産的行事の５種類があります。私が本稿で取り上げている修学旅行は、豊かな自然や

文化に触れる体験を通して学校における学習活動を充実発展させることを目指しています。また、自律的な集団行動を通して、健康や安全、集団生活のきまりや社会生活上のルール、公衆道徳などについて望ましい体験を得ることにより、人間としての生き方について自覚を深め、将来の社会人として自立していくための態度や能力を育てることにつながります。

ご承知のとおり、今年度から中学校では年間授業時数が従前の９８０時間から１０１５時間に増えており、それに伴い年間の授業時間を確保のため、各学校では行事の整理や統合等を行い、内容面での精選に努めています。本校も各種行事のみならず、教育活動の見直しに取り組み、今年度に備えてきました。ただし、修学旅行に関する限り、生徒の今後の学校生活や人生にとって計り知れない波及効果が期待できますので、生徒の豊かな体験を優先した企画・立案を促したいと考えています。

原稿と感想・ご意見の募集

JAELEN では皆様の原稿を随時、募集しております。皆様の近況報告、エッセイ、上越時代の思い出、英語教育に関する話題など、お好きなテーマでエッセイをお寄せ下さい。お問い合わせは JAELEN 編集部（北條、野地、飯島 e-mail:francisiijima@yahoo.co.jp）まで、お気軽にご連絡ください。

編集後記

私が日曜日に通うとある場所で、H さんという鳥類学者の方と知り合いました。H さんは物静かな紳士ですが、ウグイスの研究で先駆的な方です。雑談をしているうちに、H さんが上越教育大学大学院にＳ県からの派遣で学んだ元県立高校教師であり、Ｉ県からの派遣で学んでいた私とも 1 年間、在学期間が重なっていることが判明しました。関東地方の一地方都市で上越の院生ＯＢが巡り合った偶然に二人は意気投合し、大学院時代の話に花が咲きました。刺身定食を食べに通った直江津の定食屋Ｎの話、高田の定食屋Ｋは駐車場が狭いといった話で盛り上がりました。遥か昔、私が 20 代最後の 2 年間を過ごした上越教育大学ですが、その記憶は決して薄れません。

今年も上越英語教育学会が近づいてきました。毎年のことですが、越後湯沢で乗り換えた「はくたか」が関川を渡り、妙高が見えてくると上越に着いたという実感が込み上げてきます。ドアの前に立つと、修士論文のテーマが決まらず悩みに悩みぬいたこと、研究の方向性について背中を押してくれた先生や支えてくれた友人たちのことが脳裏を駆け巡ります。上越がなければ今の自分はなかったと改めて確信したころ、直江津駅に降り立つのです。　　（編集委員会 H.I.）

2012 年 7 月 8 日発行

発行者　上越英語教育学会

JAELEN 編集委員会

北條礼子（上越教育大学）

野地美幸（上越教育大学）

飯島博之（埼玉県立大学）